



Title	書評 カワネズミ探しの夫と旅の記憶。
Author(s)	大館, 智志
Citation	哺乳類科学, 58(1), 186-187
Issue Date	2018-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72190
Type	article
File Information	honyuuruikagaku_58_186-187.pdf



[Instructions for use](#)

近年社会的関心が高まり、関連する研究が多くあることから、将来的に定着が進んでいく可能性が高い。

ここで、著者は動物法の体系化を試みる。まず、動物法の体系化に関する先駆的な仕事として、吉田眞澄氏が編集代表の「ペット六法」を紹介している。吉田氏は人と動物の関係に注目し、動物法を7つの項目に分けた厳密な体系分類をしている。法学者がどのように法律を体系化しているのかがよく分かるようになっていく。それを踏まえ、著者自身がより簡易で分かりやすい分類の仕方として、人と動物の関係に着目し、「人が動物をまもる」「人を動物からまもる」「人と動物が住む生態系をまもる」「人が動物をつかう」の4つに分ける分類法を提案している。

第II部ではこれら4つの観点から、第5章で動物愛護管理法、第6章で外来生物法、第7章で家畜伝染病予防法・牛海綿状脳症対策特別措置法・狂犬病予防法、第8章で身体障害者補助犬法についてそれぞれ具体的に説明する。第5章および第8章では、本書の初版が出版された2009年以降に公布された関連法やその後の動向について紹介されており、課題解決に向けた動きが分かる。一方、第6章および第7章については、付表は最新のものに更新されているものの、解説にはほとんど変化がない。初版の出版から7年が経ち、その間に解決が進んだ課題やそれに伴い見えてきた新たな課題もあると思われる。法学者の視点からこの期間に起きた変化についても少し解説してほしい。

動物法の将来展望を述べた第III部では、動物の福祉(第9章)および権利(第10章)、動物法の担い手(第11章)について議論される。動物福祉に関するルールは、現在の日本法では動物の属性(家庭動物、実験動物、産業動物など)によって異なる。さまざまな属性をもった動物に、どこまで均質で高度なルールを定めてゆくことができるかが課題とされている。動物の権利は、「人/物」二元論を前提とした日本法では認められていない。権利主体である人以外をすべて物とすれば、動物は物であり権利客体となる。ここで、動物を「法人」にすることにより動物に権利を持たせるための思考実験が行われ、そのためのさまざまな理論的・立法技術的な課題が提示されている。将来動物の権利が認められたとして、次にはだれが動物の権利を代行行使するのか、つまりだれが「動物法の担い手」になるのかという問題が出てくる。著者は担い手として、特に動物保護団体がどのような役割を果たすことができるか考察している。先進的なイギリスの動物保護団体と日本の動物保護団体を比較することで、存在感の薄い日本の動物保護団体の問題点を示し、

活動の公益性と公平さが必要だと説く。

我々野生動物研究者は研究を遂行するために関連する動物法を理解することが必要不可欠であるが、私を含め法律に苦手意識を持っている研究者は少なくないと思う。相互に関連している法律の管轄省庁が異なるために体系的把握が困難で、場合によっては幾重にも渡る煩雑な手続きが必要になることも無関係ではないだろう。動物法の体系化・理論化が進むことで、法律が体系的に理解しやすくなるかもしれないという期待を込めて今後の動向に注目していきたい。

また、野生動物や実験動物の研究者側からも、法学者や動物保護団体とは異なる視点から動物法に対して積極的に関与していく必要もあるだろう。一部の動物保護団体のイメージが先行してしまいがちではあるが、感情的・恣意的で科学的視点を欠く活動をしている団体がある。このような活動が一般市民に支持され、立法や行政に反映され、公益性や公平さが失われることを私は危惧する。批判するだけでなく、研究者として科学的な視点を交えて人と動物の関わりについて市民に普及していく必要性を感じた。

鈴木 聡 (神奈川県立生命の星・地球博物館)
✉ ssuzuki@nh.kanagawa-museum.jp

『カワネズミ探しの夫と旅の記憶』

阿部玲子・阿部 永 [著]

(エコ・ネットワーク, 2018年, 159頁, 1,620円)

本書は、元北大農学部教授で日本哺乳類学会の会長もされていた阿部 永さんのカワネズミ (*Chimarrogale platycephalus*; 真無盲腸目トガリネズミ科) の採集旅行記を随伴された奥様である玲子さんが中心となって著したものである。

阿部 永さんは、現在の日本哺乳類学会の母体である哺乳類研究グループと日本哺乳動物学会の中核メンバーの1人であり、哺乳類の研究一筋に打ち込んできた方である。彼の主な研究対象はモグラ類、トガリネズミ類、ネズミ類などの小型哺乳類であるが、哺乳類一般についての日本における第一人者である。阿部 永さんは北大農学部を退職後、彼の研究の集大成ともいえる『日本産哺乳類頭骨図説』(北大図書刊行会)を2000年に上梓され、研究活動に一区切りをつけた。しかし、それで終わらないのが阿部さんの性分である。若い頃から収集していた日本産小型哺乳類の中で、カワネズミは自分ではほ

とんど採集できなかったことに未練を感じ、いつかは体系的に捕獲しようとかねてから計画していたそうである。そして阿部さん自らも携わった鳥獣保護法の改正により、日本産哺乳類の全種の捕獲が許可制となり、小型哺乳類も環境省直轄の種を除き都道府県別に捕獲許可が必要となった。複数の県境をまたぐ調査は非常に面倒なことになったのである。そのために阿部さんは、改正鳥獣保護法が施行される前に、駆け込み的にカワネズミの捕獲旅行を計画したのである。その調査は、南は九州の熊本県から北は青森県にわたる広大な地域が対象である。退職して久しい身で、まさに日本を縦断する採集を自家用車やレンタカーを一人で運転して敢行した。その時に得られた標本を用いた研究結果は、国内外の専門雑誌に何本か論文化されている。

また本書の採集旅行で捕獲されたカワネズミを含んだ阿部さんが学生時代より採集した膨大な数の標本は、彼の教員キャリアの振り出しの場である北大北方生物圏フィールド科学センター植物園標本館（旧北大農学部博物館）に収蔵されている。阿部さんは、標本に加え、採集日記や記録も当館に寄贈され、これら標本群の学術的な付加価値を高めている。さらに書評者（大館）らも、世界中のトガリネズミ類などの標本を当標本館に寄贈したので、これらを総合すると、北大植物園標本館は世界的にみても充実したトガリネズミ類とモグラ類の標本群を所有している。そして今や、国内外の数多くの研究者が、これらの貴重な標本を目指してこの標本館を訪れてくる。これらの標本は北大、いや、日本の哺乳類学にとって、至宝の一つである。

本書は、採集旅行記であるが、無味乾燥な採集記録の裏側のエピソードを著したものであり、採集標本の補足記録として貴重である。本書は、後書きをいれても159ページの短いものである。構成は2000年から2002年にかけて行われた8回の調査旅行のそれぞれを1章として8章からなっている。実際に玲子さんが日記をつけたのは2002年のものだけであったが、それ以前の記録は永さんの採集日記を元に記憶をたどりながら書き起こしたものである。どこで誰に遭って、どのルートで調査を行い、どの旅館に泊り、なにを食べたか、そして調査の時に会った動物などの話などを随筆風に書かれている。そして各章の後には、永さんの動物の採集記録も収録している。

それにしても玲子さんはフィールドワーカーでもないのに、全国津々浦々山奥にいたる長距離の採集によく付き合ったものである。長期にわたる採集旅行では、しばしば孤独感を味わうこともある。そのような時、言葉を

交わす伴侶がいたからこそ、永さんはつらく危険を伴う採集や手間のかかる標本処理も続けられた違いがない。研究者にとって、近しい人の理解とサポートはなによりの研究継続の心の支えとなるものである。

後日談であるが、阿部さんのこのカワネズミの確かな捕獲技術に期待して、40年近くもカワネズミの捕獲記録がなかった台湾での採集旅行を2003年に計画し、阿部さんにご同行願った。私はそこでカワネズミの捕獲法を伝授していただき、短期滞在中に3頭もの台湾産カワネズミ (*Chimarrogale himalayica*) を捕獲することに成功した。この時、多数の台湾の学生や研究者が見学に来て、後に彼らにより十分な数のカワネズミが捕獲され、系統・分類学的な研究が進んだ。阿部さんのカワネズミの捕獲技術は海外の研究者にまで活かされたのだ。

阿部 永さんは筋金入りの研究者であったが、それにもまして少年時代からの根っからの採集者・ハンターであり、動物を採集する技術自体も極めようとしていた。彼の研究業績は日本の哺乳類学の近代的な発展に寄与したことはよく知られているが、採集者としても一流だったのである。本書は、阿部さんの採集時の心のうちや発言も綴られており、彼の研究活動の裏話の一部を垣間見る良い機会を与えてくれる。

最後に、この場をお借りして私事ですが一言申し上げさせていただくことをお許し願いたい。私は阿部さんご夫婦には、学問のみならず個人的にも大変なご恩を受けて来たことに感謝しております。いつまでもお二方ともにご健勝であられることを、心からお祈り申し上げます。

大館智志（北海道大学低温科学研究所）

✉ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp

『有袋類学』

遠藤秀紀 [著]

（東京大学出版会，2018年4月，272頁，4,200円＋税）

有袋類とは、よく知られているように育児嚢と呼ばれる構造の中で未熟な新生子を育てる哺乳類の一群である。脳のサイズが相対的に小さいため真獣類よりも劣った哺乳類という印象を持たれがちであり、その分布域や進化史も彼らの“下等性”を裏づけるかのようである。例えば南アメリカ大陸では、チラコスミルスなどの大型捕食者が北方から移住してきた食肉類との生存競争に敗れ、オポッサム類など特殊化程度の低いものだけが現存している。また、有袋類が幅広いニッチへの適応放散を